国立国語研究所学術情報リポジトリ

文献レビュー9 Papen, Uta (2010) “Literacy mediators, scribes or brokers? The central role of others in accomplishing reading and writing”

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2024-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富岡, 花 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000271

Papen, Uta（2010）

“Literacy mediators, scribes or brokers? The central role of others in accomplishing reading and writing”

***Langage et société*, 2010(3), 63-82.**

富岡　花
監修：角　知行
2024 年 7 月 1 日

1. 問題提起

「Literacy mediators（よみかき媒介者）」とは、他者に代わって幅広い読み書きをする者を指し、「新識字研究」において、広く使用されている用語である。新識字研究では、よみかきを社会的実践として捉え、個人の能力だけでなく、文化的な規範、社会的関係、人々の生活場面などによってパターン化されると考える。筆者であるパーペンもこの観点に立ち、個人の枠を超えたより広い文脈の中で、よみかき実践が社会生活でいつ、どのように行われているかに注目することで、それを達成する上での他者の役割とその重要性が明らかになると考える。

本論文では、パーペンがナミビアでのエスノグラフィー調査で得た事例から、様々な社会的文脈における「literacy mediation（よみかき媒介）」の状況を整理する。また、他者のために／他者と共に行われるよみかき実践を表す用語は、「literacy mediation（よみかき媒介）」の他に、「scribing（代筆）」「brokering（仲介）」がある。本論文は、それらの用語が示す定義を先行研究の事例と照らし合わせながら整理する。その上で、よみかき媒介の概念と、文書を介したよみかき実践を達成する上での他者の役割とその重要性を考察する。

２．調査概要・方法

本論で紹介する事例は、パーペンが 1999 年～2000 年にナミビアで現地観光事業のエスノグラフィー調査をしていた時のものである。調査方法は、主に参与観察とインタビュー

である。パーペンは調査訪問をしたいくつかの観光事業団体の中で、ツアーガイド事業をしていた「カトゥトゥラ対面ガイド付きツアー」という小さな団体と長期的に関わるようになった。この団体は、首都の旧黒人居住区で育った3名のガイドにより成り立っており、外国人観光客に居住区の案内をしていた。パーペンはかれらの仕事に多様なよみかき実践があること、また、業界の新参者としてナミビアの観光市場になかなか参入できずに悩んでいたことに気づき、アドバイザー役を申し出た。その後、定期的にかれらの活動を参与観察しながら、市の職員との会議に同伴したり、書類の作成などを手伝ったりして、パーペン自身がよみかき媒介者として団体と関わるようになっていた。

本論文では、主にこの団体との事例を2つ紹介している。また、他団体との調査、及び、他の研究プロジェクトの参加者への調査で見られたよみかき媒介の例も適宜、補完的に示している。

3. 事例紹介

筆者であるパーペンがフィールドワークを行っていた頃、ナミビアでは観光業が国の経済発展の重要な柱の一つとなっていた。しかし、アパルトヘイトの歴史的背景もあって、国の観光業を占めていたのは、白人系ナミビア人または外国人が所有する民間企業だった。そのため、政府は人種間の平等の是正と、黒人コミュニティのエンパワーメントを目的に、地域ベースの観光事業を推進しようとしていた。

また、ナミビアの公用語は英語であり、観光業ではもちろん、役場や教育機関などの場を含む公共のコミュニケーションでは英語が使用される。しかし、多くの人はアフリカ諸言語を母語としており、英語は第二言語であった。

本論文の事例で登場するツアー団体のガイドたち3人もヘレロ語話者であった。かれらは中等教育を修了しており、学校教育で標準の英語力を有し、筆者であるパーペンと顧客とは英語で会話していた。しかし、観光業界で使用される言語形式や宣伝のパンフレットで必要なマーケティングのディスコースには不慣れだった。そのため、宣伝ビラの作成には、ジャーナリストの知人の助けを得ていた。大衆向けに書くことに慣れているジャーナリストが、ガイドたちのよみかき媒介者となったのだ。このように、よみかき媒介者は、特定の分野やそのディスコースに知見を持つ場合があり、単に非識字者に代わって読み書きをするだけではないことを、パーペンは強調する。

以下より、筆者であるパーペン自身がよみかき媒介者として働いた事例をまとめる。

3-1. 事例①

ある日、パーペンはツアー団体と市の観光局の担当職員との会議に同伴した。会議の議題は、市の観光局と地域のガイドたちとの連携と協働についてであり、研修の開催が検討されていた。会議はガイドたちが感じている研修内容のニーズについて共有する場のはずだったが、議論は英語で行われ、担当職員が一方的に研修内容を提案した。提案に対して、

ガイドたちは不安に感じる点や意見を述べようとしたが、慣れないオフィス環境と職員の態度や彼女が使用するフォーマルな英語に圧倒されてしまっていた。そこで、パーペンは媒介者となって、ガイド３人と市職員との間に入って、出された提案に質問やコメントをしたり、会議中にメモをとったりした。メモは調査目的で取り始めたものだったが、職員の発言を記録していたことで、後に提出を求められた書類の作成時にメモが役に立った。研究者であるパーペンはメモを取ることに日常的に慣れていたが、ガイドの３人は口頭でのコミュニケーションとその記憶により頼る傾向があった。

以上の状況のように、上下関係のある社会的状況において、よみかき媒介者は当事者間の力関係（パワーダイナミックス）の変容にも役立つ可能性を持っている。しかし、パーペンはこの事例において、自身が市の職員とガイドたちの力関係に変化をもたらすことはできなかったと省察する。なぜなら、この会議をきっかけに行政の観光業の政策と方針、それを取り巻くディスコースへの理解を深めるようになったパーペンは、それらを会議時に十分に理解していなかったことに気づいたからである。

行政機関でのよみかき媒介に関する先行研究では、よみかき媒介者が果たす「cultural broker（文化仲介者）」としての役割の重要性が示されている。文化仲介者は、文字の解読や翻訳だけでなく、その背景にあるイデオロギー的意味を理解した上で、よみかき実践をすることが求められる。パーペンは会議でメモを取り、ガイドたちに代わって質問やコメントをしたが、行政の方針と関連させてガイドたちの意見を支えることができなかった。パーペンはこの会議での自身のよみかき媒介者としての働きについて、その場の背景にある文脈やディスコースを当時、十分に理解していなかったために、文化仲介者や通訳者としてのよみかき媒介者の役割は果たせていなかったと省察する。

この事例が示したことは、当事者がより弱い立場に置かれているような状況下で、その特殊な社会的文脈、及びそれを形成するディスコースへの理解なしに、抽象的な読み書き能力や言語スキルだけがあっても、かれらの立場を大きく変えることはできないということである。

3-2. 事例②

２つ目の事例は、ある外国の支援団体から、地元の工芸センターとの合併事業を提案された際に、その支援団体のコンサルタントとガイドたちの仲介役をしたものである。合併事業が実現可能かどうかの調査が支援団体のコンサルタントによって行われ、ガイドたちとの対談をもとに報告書が作成された。ガイドたちから筆者であるパーペンに依頼があったのは、その報告書の確認とその返答の代筆だった。この事例で、パーペンは前述の事例よりも積極的によみかき媒介者として関わることになり、状況の変化を生んだと考える。パーペンは、自身の行動が調査に影響を及ぼしたことを前置きし、自身の行動も分析の対象としている。

ガイドたちは、提案された合併事業の取り組みに市場が見えず、提案に反対する旨をコ

ンサルタントに伝えた。しかし、コンサルタントが作成した報告書には、ガイドたちの意図が適切に表現されていなかった。その上、フォーマルな言語形式で書かれており、内容も透明性に欠け、理解が難しかった。そこで、パーペンはよみかき媒介者となり、ガイドたちに報告書の内容を解読し、かれらと口頭で話し合ったことをもとに報告書への返答を代筆することになった。パーペンは、過去に国際機関で働いた経験があり、報告書の言語形式に慣れていた。返答を書く際には、コンサルタントが使用したフォーマルな言語形式に合わせて、適切な言葉を選んだ。この時、パーペンとガイドたちは同じ目標意識を共有し、すでに信頼関係ができていた。パーペンは自身が持つ経験とガイドたちとの関係性が自身のよみかき媒介者としての働きを形成したと述べる。

結果、合併事業は実施されず、パーペンは自身のよみかき媒介者としての働きが少なからずその結果に影響を与えたと考える。そして、自身の役割を、南アフリカの有色人コミュニティで同じように活動した Malan(1996)が定義した、「専門家」の媒介者('expert' mediator)と類似すると考察する。

4. 考察

本論文は、先行研究と以上の事例から、「よみかき媒介（者)」「代筆（者)」「仲介（者)」の用語が示すよみかき実践の違いを考察した。その結果、これらの用語が指し示す概念には、それぞれ異なる部分と重なる部分があることをパーペンは示した。そして、どの用語も他者のために／他者とともに行うよみかき実践の多様な特性を明確に捉えることはできないと結論づける。

例えば、1つ目の事例で、パーペンが市職員の発言を発されたままに書き取った行動は、Baynham and Masing(2000)が定義した「代筆者」の働きに近い。2つ目の事例で、パーペンが代筆した返答は、まずガイドたちに報告書の内容を解読して伝えることから始まり、ガイドたちと共に話し合って作成された。その際に、パーペンはコンサルタントが使用した言語形式に合わせて、文書の構成や適切な言葉の選択を行った。この事例でのパーペンの役割は、Baynham and Masing(2000)によれば、「よみかき媒介」と言える。両事例のよみかき実践が、他者のために／他者と共に「書く」作業でも、それぞれの事例でパーペンの役割が異なっていたことは明らかである。

また、両事例では「書く」ことだけでなく、1つ目の事例では会議の場とその背景文脈を「読む」ことが求められ、2つ目の事例では報告書の文書を読み、それをガイドたちに分かりやすく言い換える「翻訳」作業を行った。以上のパーペンの役割は、「翻訳者」または「仲介者」とも表現される。このように、よみかき媒介者が行うよみかき実践は多様であり、各用語の定義が重なる部分と異なる部分がある。また、研究者によって用語が示す範囲も異なる。

では、何が「よみかき媒介者」「代筆者」の役割とそのよみかき実践を決めるのか。パーペンは、3つの観点を挙げている。1つ目は、求められているよみかき実践の目的。2つ

目に、そのよみかき実践の社会的文脈。3 つ目に「よみかき媒介者」「代筆者」と依頼者との関係性である。代筆者の役割を研究した Kalman(1999)は、依頼者と代筆者の関係性によって、代筆者の役割も多様となることを示した。本論文の事例も、同様のことを示している。

２つ目の事例で、パーペンはガイドたちが置かれている背景とその社会的文脈などを十分に理解し、かれらとの信頼関係もできていた。また、ガイドたちも、筆者の知識や経験が自分たちに役立つことを理解し、必要としていた。そのため、パーペンはガイドたちから受け入れられ、よみかき媒介者としての「正統性 (legitimacy)」を有したと、考察する。その結果、口頭での話し合いを文字化し、文書の編集者としてよみかき媒介を行っただけでなく、コンサルタントとガイドとの間に立ち、ディスコースの「仲介者」としての役割を果たした。

さらに、同事例でパーペンのよみかき媒介者としての役割に大きく影響したのは、支援団体のコンサルがパーペンをガイドとの仲介役として認めたことにもあると指摘する。このことから、よみかき媒介者は、社会的及び文化的ディスコースをつなぐ、「文化仲介者」でもあると考察する。「文化仲介者」は、言語の翻訳や通訳にとどまらず、文化差異を理解した上で、依頼者を支援する。よみかき媒介者も、文書の読み書きや言語の通訳・翻訳だけでなく、それを取り巻く社会的文脈を訳すことが多い。

以上の考察から、本論文は、「よみかき媒介者」「代筆者」「文化仲介者」の社会的役割と、依頼者との関係が、読み書きが他者のために行われるのか、他者と共に行われるのかを理解する上で重要な観点となることを主張する。また、よみかき媒介者らが具体的にどのようなよみかき活動を行うかは、社会的文脈と権力関係の有無にもよることを示した。

5. 結論

本論文でパーペンは、よみかき媒介者が行う多様なよみかき実践を示し、それらを表す用語の定義と、何がよみかき媒介者の役割を決めるのかを考察した。よみかき媒介者は単に文字の代読や代筆をしているわけでなく、依頼者と様々な人やコミュニティとの間を取り持ち、特定の文脈や状況下でのよみかき実践の達成を可能とする。

先行研究も踏まえて、パーペンが改めて強調したのは、よみかき実践を達成する上での他者の重要性である。よみかき媒介は、識字が普及していないコミュニティだけで見られる現象では決してない。また、本論文の事例や Fingeret(1993)の先行研究が示すように、他者に頼るということは、識字能力の欠如や、他者への依存を示すわけではない。むしろ、よみかき媒介者を利用することで、個人の技量や専門分野の枠を超えたよみかき実践が可能となる。場面ごとに求められるリテラシーが多様で、常に変化する現代社会において、よみかき媒介者は個人のよみかきを補完する重要なリソースだとパーペンは主張する。

参考文献

Baynham, M. and H.L.Masing (2000) Mediators and Mediation in Multilingual Literacy Events, In M. Martin-Jones and K. Jones (eds) *Multilingual Literacies*, pp. 189-209. Amsterdam: John Benjamins.

Fingeret, A. (1993) Social Networks: A New Perspective on Independence and Illiterate Adults, *Adult Education Quarterly 33 (3)*, pp. 133-134.

Kalman J. (1999) *Writing on The Plaza*. Cresskill, NJ: Hampton Press.

Malan L. (1996). Literacy Mediation and Social Identity in Newtown, Eastern Cape, In M. Prinsloo, M., & M. Breier (Eds.) *The Social Uses of Literacy*, pp.105-123. Amsterdam: John Benjamins.

本文献レビュー論文は、国立国語研究共同研究プロジェクト「定住者外国人よみかき研究」の研究成果である。また、本文献レビュー論文の内容に対する責任は本プロジェクトが負う。